

【共通の設問】次の傍線部「けむ」の用法を答えよ。(答え・解説は解答編)

【第1部】基礎編 (Q1～Q20)

Q1.

昔、ある所に住みけむ人。

Q2.

古き都に花咲きけむ。

Q3.

など昔の人は嘆きけむ。

Q4.

唐土に渡りけむ僧。

Q5.

昔、世にありし人は皆、月を愛でけむ。

Q6.

いかなる縁にて、かかる目に遭ひけむ。

Q7.

名にし負ひけむ都鳥。

Q8.

昔の人、いま何処へ行きけむ。

Q9.

月の都に住みけむ人ら。

Q10.

昔の歌詠みは、いかに思ひけむ。

Q11.

古き時代に栄えけむ国。

Q12.

名にし負はばいざ言問はむ都鳥、わが思ふ人はありやなしやと、いかなるを問ひけむ。

Q13.

古典作家、いかなる景色を見けむ。

Q14.

鳴き渡りけむ鳥の声、なほ耳に残る。

Q15.

古代にありけむこと、いま伝はらず。

Q16.

なぞ昔の都は捨てられけむ。

Q17.

過ぎし夏、海辺に遊びけむ人ら。

Q18.

古代の宮、いま何処にありけむ。

Q19.

春に咲きけむ桜、なほ思ひ出づ。

Q20.

昔の都の道、いかなる人ら歩みけむ。

【第2部】標準編（Q21～Q50）

Q21.

唐土の人、書きとどめけむ書物、いまも伝はる。

Q22.

いかにありし世にやありけむ。

Q23.

雪深く積もりけむ山、いまだ青し。

Q24.

など唐土の人は和歌を解せざりけむ。

Q25.

月の都を出でけむ人。

Q26.

いかなる夢を見けむ人ぞ、いま起きたる。

Q27.

昔より伝はりけむ話、なほ尽きず。

Q28.

我が祖父、いかなる人にありけむ。

Q29.

仏に祈りけむ僧、いまもありや。

Q30.

いと尊くおはしけむ御方なり。

Q31.

いかで春は来たりけむ。

Q32.

古代にありし都人、月を愛でけむかな。

Q33.

あひ知りけむ人にて、なほ親しき。

Q34.

春の野に若菜摘みけむ人ら、いまも忘れず。

Q35.

なぞあな悲しき夢を見けむ。

Q36.

我が父、いま何方にありけむ。

Q37.

京に住みけむ人、なほ忘れず。

Q38.

古典の中にありけむ言葉。

Q39.

笛の音を聞きけむ夜、なほ忘れがたし。

Q40.

いかでかかる宝を得けむ。

Q41.

唐土に渡りけむ人々、なほ故郷を恋ふ。

Q42.

春の夜、見けむ月かげ、いまでも忘れず。

Q43.

昔の世、いかなる風ぞ吹きけむ。

Q44.

我が母、若き時にいかにありけむ。

Q45.

山中に隠れけむ人。

Q46.

古き友、いま何方にありけむかな。

Q47.

春来にけむ頃、まだ雪深し。

Q48.

いかなる御縁にて、かく長く生き給ひけむ。

Q49.

風雅を解しけむ人にこそ、なほ尊し。

Q50.

古き京を捨てけむぞ、惜しき。

【第3部】 応用編（Q51～Q80）

Q51.

唐土の人は、これをいみじと思へばこそ、記しとどめて世にも伝へけめ。

Q52.

いみじき宿世の人にありけむを、いまだれぬ。

Q53.

いかでかさるべき御縁にてありけむ。

Q54.

月の都に住みけむ人々、いまでも消えぬ。

Q55.

古き世にありけむ仏徳、いま尽きず。

Q56.

何の縁にて、かく永く語り伝へけむ。

Q57.

仏前に祈りけむ心ぞ尊き。

Q58.

古典作家、何を思ひて筆を執りけむ。

Q59.

都人、唐土に渡りけむ頃、いま月清く。

Q60.

我れも歌詠みけむを、いまだ詠まず。

Q61.

古代の人、いかなる文字を書きけむぞ。

Q62.

名にし負ふ都鳥、ありし日に何を語りけむ。

Q63.

古き寺を建てけむ人。

Q64.

春雨降りけむ夜、なほ忘れず。

Q65.

月の出でけむ山際、なほ晴れわたる。

Q66.

ありがたきもの、いま見えけむやうに、世になし。

Q67.

名にし負はばいざ言問はむ都鳥、いかにありけむ。

Q68.

仏の道、古き世に榮えけむを、いまや衰へぬ。

Q69.

玉のごとくありけむ御身、いまや散りぬ。

Q70.

いかで老いけむかと、嘆く。

Q71.

古典をひもときしけむ人。

Q72.

春の野に咲きけむ花、いま尽きぬ。

Q73.

何の故にて、かかる目に遭ひけむ。

Q74.

山深く隠れ住みけむ人、いまも忘れず。

Q75.

いかにか思ひけむかな、世の人の心。

Q76.

古き人、皆嘆きけむ世の事。

Q77.

何処にありけむわが祖。

Q78.

春雪の降りけむ山里、なほ寒し。

Q79.

いかなる人にありけむかと尋ぬ。

Q80.

古き和歌を詠みけむ人々の心、いまも生きたり。

【第4部】入試レベル（Q81～Q100）

Q81.

唐土の人は、これをいみじと思へばこそ、記しとどめて世にも伝へけめ、これらは、ただ夢のごとくにぞある。

Q82.

名にし負はばいざ言問はむ都鳥、わが思ふ人はありやなしやと、いかにありけむ。

Q83.

春は名のみの風の寒さや、谷の鶯歌は思へど、時にあらざりけむゆゑにこそ、声を立てね。

Q84.

古今の歌人、なほ心を尽くしてありけむ。

Q85.

物のあはれを知りけむ人にこそ、なほ古典は伝はれ。

Q86.

雪のいと高う降りけむを、今に思ひ出づ。

Q87.

何ゆゑに古典は伝はりけむ。

Q88.

春過ぎて夏来にけむ頃。

Q89.

月の都の人にありけむを、世の人はいかでか知らむ。

Q90.

いかなる宿世にてありけむにや、と思ふ。

Q91.

古き時代に栄えけむ国も、いまや滅びぬ。

Q92.

仏に祈りけむ僧、なほ生きてありけむ。

Q93.

古代の歌人、いかにありけむかな。

Q94.

風雅を解しけむ人にあらずは、これを尊しと思はじ。

Q95.

我が祖の世にありて、いかにありけむかを尋ぬ。

Q96.

嵐山の紅葉、いま錦のごとし。ありし日もかくありけむ。

Q97.

いみじき宿世にて、月を見けむ御方。

Q98.

古典にありけむ事、いま、こと多くなしと言ふべからず。

Q99.

行く川のながれは絶えず、もとの水にあらず。古き人皆、これを見けむ。

Q100.

物のあはれを知りけむ人々の心、いまでも我れに伝はる。